

アメリカでのPI生活

テキサス大学オースティン校ワゴナーセンター
Assistant Professor 森川 均

オースティンにたどり着くまで

今からおよそ3年前、2001年の5月末、オレゴン州ポートランドのヴォラム研究所 (Vollum Institute) でポストドク生活を満喫していた僕に、ラボのボス、John Williamsから一通のEメールが転送されてきました。それは、テキサス大学オースティン校ワゴナーセンター (Waggoner Center for Alcohol and Addiction Research) のディレクター、R. Adron Harrisからのもので、電気生理学的手法を用いて drug addiction の研究をしている人材を Assistant Professor レベルで探しているという内容でした。その当時、まだポストドク歴2年余りで、もう後1—2年はポストドクを続けようと漠然と考えていた僕にとっては青天の霹靂でしたが、以下の2つの理由により因縁めいたものを感じたこともあり、とりあえずやってみようかという気になりました。

1) 1999年4月にヴォラム研究所に来るまで京都大学麻酔科に所属していた関係で、麻酔薬及びアルコールの分子ターゲットの研究の第一人者とも言える Adron を知っていたこと。そればかりか、京都大学麻酔科主催でアジア・オセアニア麻酔学会を開いた時 Adron を基調講演者として招いたので、直接話をしたこともあったこと。

2) 幼い頃テキサス州ヒューストンに3年間住んでいたことがあり、ヒューストンから200マイルほどのオースティンに行くことに一種里帰りのような感慨を覚えたこと。

というわけで数日後、履歴書と簡単な研究計画を記したメールを Adron に直接返信しました。1か月ほど何の音沙汰もなく、やはり駄目かという気分になりかけていたら、7月の初めに突然、インタビューに招待したいというEメールが Adron から届きました。メールを見た瞬間、心臓の鼓動が増し、俄然、緊張感が高まって来たのを覚えています。そして、8月の末にインタビュ

ーを受けに行くことになりました。

インタビューというとトークをするということになるわけですが、Assistant Professor レベルのインタビューでのトークは通常2段構えで、研究内容を紹介する普通のトークと、今後の研究計画をスライドなしで紹介するトーク (チョークトークと言います) があります。特に後者のチョークトークが決定的に重要だということを周りの人々から忠告されて (脅されて?) いたので、その準備にはかなり頭をひねりました。要するに最初のグラントのネタを何にするつもりかの紹介で、インタビューする方としてはお金が取れる人であるかどうかを知りたいわけです。実際のインタビューはことのほか順調に行き、1週間後には仮のオファーを受けるという予想外の展開になりました。その後スタートアップ資金の交渉などを経て、年末に正式なオファーレターをもらい、即日僕のサインをして送り返し、翌年2002年7月、めでたく一家4人でオースティンに移ることになりました。

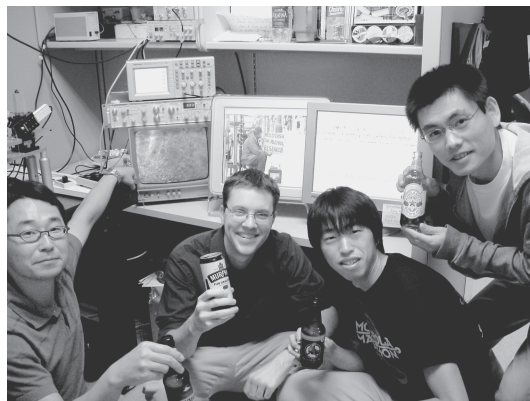
森川ラボの船出

森川ラボというのもおこがましいですが、当然、最初は構成人員1名、僕一人の超零細企業です。予想してはいたものの、これはかなり心細い状況です。それでも11月にはNeuroscience Programの大学院生が加わり、翌年の3月にはNIHの5年もののグラントが当たることになり、さらに4月にはポストドクがやって来て、ラボとしての体裁が整い始めました。現在は計3台の電気生理セットアップがあり、うち1台は各ラボをローテートする1年目の大学院生が使っています。今年の秋には現在建築中の新しい研究棟に移り、かなりのスペースをもらえることになっているので、さらに1—2台のセットを加え、そのうちの1台にはコンフォーカル顕微鏡によるカルシウムイメージング装置を付ける予定でいます。

ラボの研究内容を簡単に紹介しておきますと、いわゆる常用性薬物（覚醒剤、アルコールなど）の急性及び慢性作用を、脳スライスを用いて電気生理学的手法により調べています。対象としている脳領域は中脳から側座核に投射するドーパミン系経路で、これは前ボスの John Williams のラボの流れを汲むものであり、独自色を出しながらやっていくのが苦勞のいるところです。詳しくは、ホームページ（www.utexas.edu/neuroscience/Neurobiology/HitoshiMorikawa）を御覧下さい。

他ラボとの交流としては、ワゴナーセンター合同ミーティングが毎週木曜にあり、各ラボの大学院生、ポスドクが交代で発表していきます。また、僕とほぼ同時期に Assistant Professor になった Section of Neurobiology の Nace Golding のラボとの合同ラボミーティング（Brain Data Bash）が毎週金曜にあり、朝飯がてらドーナッツをぱくつきながらやっています。Nace のラボは、聴覚系の脳幹神経核の性質を脳スライスでの電気生理学的記録により調べており、同じ電気生理のよしみで同士のよい雰囲気生まれ、かなり突っ込んだ議論が展開されるのでなかなか楽しめます。

ここテキサス大学オースティン校は学生数5万人を超える巨大な大学で、そのうちの大半を undergrad（いわゆる学部学生）が占める大変にぎやかなキャンパスであります。ただ、21歳以下はアルコール禁止のアメリカでは、こういう un-



シングルチャネルを肴に酔っぱらうラボの面子、左端が僕です

dergrad institute はドライキャンパスということになっており、大学構内で酒を飲むことは公にはご法度です。僕のラボでは各種ビールを冷蔵庫に常備していますが、undergrad がなくなった5—6時以降（主に金曜）、他ラボのメンバーも交えてアルコールの人体摂取をしながら、人はなぜ酔っぱらうのかといったテーマに思いを馳せています（写真参照）。

最後になりましたが、僕のラボ、ワゴナーセンター、あるいはオースティンでの生活等にも興味がありましたら、morikawa@mail.utexas.edu（日本語OK）までどうぞ。